

## いつかまた、福島へ

今回、みみタロウは、昨年3月11日の東日本大震災で被災され、福島県から滋賀県に来られた中国出身の志賀有紀さんにお会いし、地震発生当時の状況についてお話をうかがいました。



結婚して中国四川省から日本に来て19年。以来ずっと福島で暮らしてきました。

**大地震** 3月11日2時46分、地震発生当時、私は家の2階、中学2年の長男は1階に、

次男は小学校にいました。今回の地震はこれまでとは違い、最初からかつてないほど激しく揺れ、いつまでたってもおさまるところか益々大きく揺れていきました。これまで地震で逃げようと思ったことはありませんでしたが、今回は外に出ないと玄関や窓が変形して出られなくなると感じました。ベランダに出ると、地面が波打ち、家や塀がまるでおもちゃのようにバタン、バタンと倒れていく光景が目の前にありました。少し揺れがおさまると、照明器具は落ち、壁も食器棚もあらゆるものが倒れ、長男はテーブルの下にうずくまっていた。二人で外に出ましたが、外はとても寒かったので余震が少しおさまると家に入り、また揺れると飛び出すということを繰り返しました。下の子はまだ学校におり、保護者のお迎え待ちだと聞いたので、車で学校に向かいました。途中、道路には亀裂が入って穴が開き、屋根や瓦が落ち、塀は倒れていましたが、周辺の住民が道の障害物を取り除いてくれていたおかげで、車が通ることができました。余震はその後も続き、水もガスも電気も使えなくなりました。「避難所に避難してください。場所は～です。」というアナウンスがあったので避難所に行きましたが、その日は食事の配給はありませんでした。それでまた家に戻り食料を買ったのですが、開いていた数軒の店には既に水も食品もなくなっており、朝炊いたご飯の残りを暗闇の中、三人で分けて食べました。夜中も余震は続き、心細い思いをしながらテーブルの下で一睡もせず過ぎました。

**一夜明けて** 次の日、給水所が設置されたので、飲料水は確保できたものの、電気は来なかったのでご飯は炊けません。その翌日には、電気が復旧。しかし断水はずっと続きました。トイレはできるだけ流さないようにして風呂の残り湯で流していましたが、その内風呂水もなくなり、トイレが使えなくなりました。食べ物は、今まで「地震は他人ごと」と思って非常食を準備していなかったため、おにぎりしか食べられません。車は、ガソリンがわずか

しか残っておらず、給油ランプがついている状態。地震当日、いつものように後で給油すればいいと考えそのままにしている、ところが翌日スタンドに行くと、どこも長蛇の列。待っていたらガス欠で車が動かなくなってしまうので、そのままに引き返しました。電話は、公衆電話は壊れていて、携帯は3日目から場所によって使えるようになり、中国の父から「生きてるか！」と電話がありました。12日には福島原子力発電所の最初の爆発があり、情報も混乱した中、続いて14日、2回目の爆発がありました。「これはもう、いつ何があってもおかしくない状況。ここは危険だ」と認識しました。

**脱出** 滋賀県の友人に電話すると、「おいで」と言ってくれたので、滋賀県に向かうことにしました。ところが長距離バスに乗ろうと思ったら運休。JRも運休。航空会社や福島空港には電話は通じません。空港から臨時便が出ていると聞き、ガソリンがもつかどうかと思いつつ一か八か直接空港に行くことに。いつも閑散としている福島空港には、毛布をかぶり泊まりこんでいる人たちもおり、さながら戦時中のごったがえしていました。チケットの購入に何時間も列に並んだ末、ようやく自分の番になりましたが、閑空も成田も名古屋もどの便も満席で、唯一あったのが、数分後に離陸する新千歳空港行きの便。もう選択肢もなく、千歳までどこかわからないまま、その飛行機に飛び乗りました。それが北海道だとわかったのは後のこと。その後、千歳から閑空に来て、空港から電車に乗ると、こちらは何の変わりもなく、普通の風景と暮らしがあり、涙がぼろぼろ出てとまりませんでした。

**心の故郷、福島** 私の家は福島県須賀川市にあり、福島原子力発電所から50km圏内の放射能線量がまだ高い地域です。子どものことを思うと、放射能の身体への影響が心配でなかなか帰れそうにありません。ここ滋賀県では、子どもも私も周りの人々に支えられ、少しずつここでの暮らしにも慣れてきています。それに、自分だけがこんな目に遭っているのではなく、被災者みんなが頑張っています。大勢の人が応援してくれているし、必ず復興して未来はあると信じ、前向きに生きていこうと思っています。福島は、お米も野菜もおいしく、人々も本当に優しいなつかしい故郷です。「福島」、と聞くと、「あつ、私のことだ」と思うんですよ。